
ハロウィンの悪夢

廣瀬 るな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハロウインの悪夢

【Zコード】

N4195F

【作者名】

廣瀬 るな

【あらすじ】

ハッピー ラブコメ。それはハロウインの夜の事でした。「男なんか大嫌い！」キヤットウーマンは叫びます。そこに現れた“見てくれだけは”好青年のアンチヒーロー吸血鬼君。彼に追い詰められた美女の反撃の物語。

1 藤原ひなたとくだわこ（繪書き）

ハロウイン明けたその次の日の朝に天からやつて来たハッピーラブコメ。

「ちい遅いんじやん？」はお許しくださいね

1 夢落ひじさせてください

目が覚めて隣りにそこそこ良じ顔の男が寝ていて。

「やつちやつた。」

あずさはむつくりと起き上がり

“しまつたなあ”

つて顔で頭を搔いた。ようによつて

“初めて”

なのに成り行きってのはどうかと思う。まあだいたい25越えて処女つてのはなしだし、彼の方も

『まさかっ！？』

つて感じで別に罪があるとは思えないけれど氣まずい事には変わりなく

「やつちやつた。」

彼女はもう一度呟いた。日差し明るいマンションの一室。明らかに男部屋。高そうなスピーカーに部厚いヘッドホン。寝ているベッドは明らかにシングルよりもでかい。

お酒を飲んでいた訳でもないし、記憶が無い訳でもなし。彼が一見さんつて訳でもない。むしろ、このひと月微妙にアプローチされていた男でまあ知らない仲じゃないし、可能性的に

“ひつなつちやう”

事もなくはない。それにしても

「やつちやつた。」

何しろ彼女、男が大嫌いだったから。関わりになんかなりたくないのにこんな事になるなんて。高い所から見下ろされる感覺も、偉そくに指図したがる傲慢な所も、口先だけで調子の良い所も、鬱が生える事も、その存在全てが大嫌いだった。だから昨日の夜、正確には今日の明け方の彼女は、

“すつかり騙されちまつた！”

事になる。何しろ徹夜をして思考力と言つものがまるで無かつたんだから。そこで

「よし！」

寝ている男から田をそらし、ポンと手を叩いた。

「無かつた事にしよう！」

それが良い。そう一人微笑んだはずが、

「それって無いんじゃないの？あずささん。」

裸の男がいきなり起き上がり、がばつ！

「うおつ！？」

明らかに

“男の腕”

つていうのに抱きしめられ、彼女は思いつきり固まつた。首筋にザラつて当たるのはこの男の無精髭で、

「ふんふん」

つて低くなつているのは

「何歌つてんのよ。」

むつとした彼女の声に逆らつ

「ご機嫌だから。」

つて調子こく男の喉。でもつて絡み付く

「逃がしませんよ。」

つて言う囁き。その指先が彼女の押さえている胸元のシーツをつつと引っ張る。

「何をらす！」

その端っこをがしつとつかみ、切れ長の強い瞳で彼を見返す。今まで誇つていた

“鉄壁な”

防御はどんな男にも効果があつた、はずなのに・・・。

「恥ずかしがらなくとも。」

市原はへらつと笑いながらによつて体を擦り付けて来た。といふか、彼女にとつてはそうとしか思えない、うあああな行動にで

た。挙げ句に

「着やせするんだね。」

クスクスと笑いながら田線を落とした。もがきをそこに有るのね・・・

・・・。

「Dは有るよね。」

彼女の胸元がギュッて寄る位強く抱きしめられ、あずさの頭に

“セクハラ”

と言ふ言葉が浮かぶ。

「絶対、嫌！！」

昨日の夜の私は絶対におかしかった！自分が男を、しかもこういう浮ついたタイプの馬鹿を選ぶはずが無いって、もう自信満々で彼の事を力一杯振り落つた。

「悪いけど、昨日の事よく覚えてるし、アレ、成り行きだから。あくまでな・り・ゆ・き。だからしつこくしないでくれる。はい、もうお終い！」

でもってえいやって、まっぱのままベッドの横に仁王立ちで降り立つた。じつにう時、恥じらひぢやいけないって知つてたから。

“可愛らしく”

したらまず間違いなく

“誘つてる？”

つて思われるって。だからあえて

“太々しさ”

演出したつもりだった。のだが・・・・・。

“何これ？”

胸の上に散らばつたいかにも

“内出血”

「覚えてるんでしょう？」

まるでワープでもして来た様な素早さで彼に背後を取られていた。

「愛し合つた印だから。」

その内容というより、

“それを言つのか？”

と言つ意味で、あずさは半ば氣を失いかけた。そう、これは夢、夢、夢。

「夢オチだ！って叫んでも良いですか？」

につこり笑う彼女に

「すぐに現実戻してあげますよ。」

市原はヒヨイッと彼女を抱き上げバスルームへと消えて行つた。

「暴れると落ちますからね。」「

と言つ言葉を吐きながら。

つづく

1 落ちついでください（後書き）

ブログで展開しているお話を。

2 ハロウイン・ナイト

“やけくそ”

と言つのはこの時の彼女の為に有ると言つても過言ではなかつたはず。体力で叶うはずが無い。何しろあずさはからうじて155cm 有るか無いかの身長で、反してかれはまるつと上を見上げでやつと顎を見上げる大きさ。その上妙に口がうまい男だつた。そう、口がうまいのだ。

初めて会つたのは1ヶ月前。マイナーな美術展を見に行つたときの事。

「この絵が気に入りましたか？」

彼はへらへらと声をかけて來た。

「まあね。」

もちろん関わりたくないからぶつきつけましたはずだつた。つまり

“うぜつ！あつち行けよ”

である。それなのにこりもせず食いついて、

「僕はこの作家のこの表現が好きなんですよ。」

と来たもんだ。美術を専攻していいた彼女としてはどうしても反論したくなり

「ああだ、こうだ」

言つてしまつたのが運のツキ。

「あつ、そうだ、じゃあ来週、ピカソ展に行きましょう。丁度チケット2枚有つたんです。良かつた。一緒に行つてくれる人が見つからなくて困つてたんです。ありがとうございました。」

それから

“1階 カフェ コキー 前 10時”

と書いた紙を彼女に押し付け

「必ず待つてますからね。」

と逃げる様に去つて行つた。

「あつ、イヤ、それは・・・・・・

その日は仕事。それに行く気なんかまるで無い。のこ。

「アドレス書いてけよ、あの馬鹿男！」

それが作戦であつたのだが。

仕方ないから律儀な彼女は勤務交代を申し出、行つたのである。

挙げ句に

「レストラン予約してしまつた。」

その上

「誘つたのは僕だか。」

「匠ピカソ 愛の創造の軌跡 スペシャルメニュー ハウスワイン

付き なるランチまで奢られ

「これ程度の料理じや満足してもらひえませんよね？今度は夜のコースでもう少し改まつたお店を選んで・・・・・。」

もつこれ以上のさばらせる訳にも行かず

「でも今度は私が、お昼に。」

と

“昼飯だけで十分だ”

と言わざるを得ない所まで追い込まれた。

それからというも、ことあることにつけまとわれ昨日の夜はついに職場までやつて來たのだつた。

「はじめまして皆さん。僕は市原直継じょはらなおつぐって言います。あ、いや、あずささんとは真剣にと付き合つさせてもうつてこるつもりです。」
よりによつてドラキュラの扮装、青白いドーラン、のくせに耳だけ真つ赤にしながら彼は頭を下げた。

「お世話になります。」

さて、お世話になるのは誰の事なのか、彼の事なのか、あずさの事なのか、その解釈の微妙なラインに同僚一同騒然となつた。

「どこで見つけたの、あんな良い男！」

仮装をしていても良い男は良い男つて事で、月2回のコンパを欠か

さない友達の真理子がトイレに逃げ込んだ彼女に迫つて来た。むつとしながら

「全然良い男じゃないし。」

と反論するものの、そんなのウマの耳になんとやら。

「そんな事聞いてない。どこで見つけたかつて事よー。」

勢い負けして

「美術館で拾つた・・・。」

そうかその手があつたか！と真理子はガツツポーズ。

「でもその前に、良い男の知り合いは良い男！！良い男、紹介してもらわないと！」

友達なんて名前だけ。真理子は自分の獲物の為にあずさを市原に売り渡した。

「今日彼女、映画館の札きり係で。」

あずさが勤めているのは地区の文化センター。そしてその夜はハロウインで、オールナイトの映画祭だつた。

「その真向かいにラウンジ有りますから良かつたらそこで待つてると良いですよ。」

と期待に胸膨らませた声で言つた。

「あなたの子猫ちゃんの事も見張つてられるし。」

ちなみにあずさのコスプレはキャットウーマン。結構これが人気ありで、周りを写している振りで携帯で写真を撮つてるヤツもしばしば。

「恩にきます。所で、真理子さん、でしたよね？真理子さん、今彼氏います？僕の友人でいいヤツいるんですけど、今度一緒にコンパでもしませんか？あつ、僕はあずさと組みますけど。」

類とも。一人は邪悪な笑顔で笑つた。何しろハロウイン。彼、吸血鬼。彼女、魔女。

『ひひひ。』

つて笑いが聞こえてきそうな二人組。

そして年に数度しか無い夜勤明け、毎日12時にはぐつすり寝て

いぬみすのおーじちやまあずわねへつじ

「じやあ僕が連れて帰りますね。」

なんて彼の車に押し込まれた。

つづく

3 “脅迫”って知ってる?

もちろんバスルームに引き釣り込まれ抵抗しようとはした。した
事はした。でも

「そうだ、後で昨日の夜の写真見せてあげますね。」

の言葉に彼女は

『写真って、何の写真だよ……。』

今朝の自分の姿を見て目の前が真っ黒になり、やがて白く浮上した。
この時思ったのは

『ガンジーになりたいなあ。』

つまり、無抵抗主義。それでもって、正義は勝つのだと。でも彼の
言つ所の

『愛の法則は重力の様に働く』

事をすっかり忘れていたのは墓穴。性悪でも愛は愛。
なすがままに体を洗つてもらい、ボディクリームつけてもら
いの。

「少し大きいけど。」

つて彼にとつては最高に

“ツボ……”

な膝上のナイトシャツを着せられた。

温かい紅茶を受け取りながら、居心地の良いソファに彼女は丸く
なっていた。見えない様にってさつきから何度もシャツの裾を引つ
張る仕草に彼が

“それよそれっ！”

な満足笑いをしている事に気がつくはずも無く、

“初めての女”

つて面倒くさいって言ひじやない？色々有つて。

含みを持たせて毒を吐いた。

「あなた、マゾ？」

「それ有りだね。」

「つて、むしろ

“今言つたそれつてどっちのそれ？処女オッケー？それともビミツつて事？”

「そんな混乱させる返事に目を白黒させた。それでもめげず「ほら私、初めてだから。これから的事考えて一人に縛られる気ないし。」

「ああ、それだつたら大丈夫。」

彼はまだまだ熱いはずの紅茶を器用に飲みながら

「もう僕は君に縛られてるから。」

危うくカップを取り落としそうになつたのは彼女の方で。動搖を悟られたくないでそつとカップをテーブルに戻し

「うち、父親厳しいから。つき合いつとか言つたら不必要にうるさいよ。」

「ああ、これはどういふよ？」の手の遊んでる男は

“父親”

出して来るヒカルをから。

「あ～。」

市原は困つた様に眉をひそめ

「明日挨拶に行くんじゃ遅いかなあ？」

いや、ヤメてくれ。彼女の口の端がぴくつと痙攣し、からつじて

「第一私の好み、あなたみたいなタイプじゃないし。」

「ういつと横を向いた。

「そつかあ。」

彼はさすがに気落ちした声で頭を振つて、テーブルの上に手を伸ばした。

「じゃあどういうタイプが好みなの？」

そりやもう、と言いかけ振り向いた彼女はからつじて

『げつ！』

と言わずに堪えた。そこにいた彼は縁なしの華奢な眼鏡をかけて、ふわりとかかる前髪がとてもはかなく見えたから

『それです。いや、正にそれ。』

なんて、言えやしない。あんまり男臭くなくて、纖細な感じのする眼鏡の似合う男の人、なんて言えやしない。でもって言葉につまり逃げの一手で

「教えない。」

うつむく彼女に

「狡いよ。」

彼がづいづと近づいて思いつきり下から覗き込まれ

「僕はいくらでもあずささんの好みの男になつてみせるよ。」

彼女の唇を

「ぺろんっ。」

舐めた。その上

「ひつ！」

つてシャツの襟元をかき合わせた跳ねたあずさを

「可愛い。やっぱ放したくないよ。」

つて押し倒した。ついでに

「寝顔も可愛いって写真撮っちゃった。あつ、これ犯罪かな？」

彼女の抵抗を根こそぎ奪つた。

つづく

4 トリック　○　トリー卜

あずさは今までこれほど自分が

“流され易い”

とは思つていなかつた。ついでにハンサムな男つて得だよなつて。
もしこれで相手が不細工な男だつたら明らかに犯罪だけど、この場合

“立証”

つてのが無茶苦茶難しいつて、いくら男が嫌いなあずさでも分かつてた。彼は間違いなく格好良い。身長高くつて、虫歯も無くて（これは凄いと本心から褒めていた）デブじやない。よいうより、スタイルグッド。部屋の趣味も良いし、たぶんそこそこお金持ち。しかも手段はえげつないけど、

「寒くない？」

つて夕闇の中を引き寄せられ、布団掛けられたりして。基本的に優しいし。

「何で私だつたの？正直に答えてよ。」

胸の中がもやもやしていた。

「ん~。」

彼は少し考え込む様にしてから

「正直に話すから、あずさにこも一つお願ひがある。それでも良い？」

それはそれは真剣な目つきで言つた。

「毒を食らわば皿までよ。」

きつと睨みつけられ、彼はにいつと笑つた。

「以前から君の事、知つてたから。」

「へつ？」

何となく心当たりは有るだけに、あずさは皿に見えてむつとした。

「ああ、そう言つ事ね。」

「そう、そう言つ事。」

彼は鼻歌まじりで彼女の髪を撫で始めた。

彼女の苗字は

“白玉”

と書く。白玉団子の

“白玉”

で、

“白玉あすざ”

超目立つ。もちろん幼い頃のあだ名は

“白玉小豆”

その上父親がそれなりに有名な会社の会長をしていたから、超・超有名で、それ狙いの男つてのは多かった。

『だから男は嫌い。』

彼女は心で呟いた。

『そんなに逆タマ狙うんだつたら、私の父親と結婚しろつうーの。』
この時、矛盾は一切無視である。ここはカリフォルニアでもなければオレゴンでもない。日本の法律は

“異性婚”

そんなあずさの心中を彼は見て見ぬ振りをする。

『最初君を見かけたのは、会長の机の上でね。家族三人の仲のいい風景だつた。』

そのデスクの有様を想像し、彼女は

『偽善者めつ！』

つて思つた。何しろその父親は母が死ぬ時も仕事で忙しく、見舞いにすら来やしなかつたじゃないか、と。

『で会長が時々嘆くんだよ、

“娘がね。”

つて。

『そりやどういう事だい！』

むかつときたあずさは振り向いて睨んでやうつとするのだが、如何せん、むぎゅつて抱きしめられて身動きが取れず。

『娘に理解してもらえない事がこの世で一番悲しい』

「な娘って、どれほど凄いんだろうって。」

な姫にて
どれほど邊しかたアミア
ヒ

「美術展で初めて見かけた時はびっくりしたよ。でも興味は有った

から探し、入れちゃった。どうせだったら遊んでやるつかって。
『もつすでござるばれてるよ!』

心のホグは彼には呪文だ。

心の叫びは彼には届かない
それは甘い声で
それと云ふが
彼は遅い打ち
それは

「でも話してみてびっくり。もう僕の好み、ドンピシャ！想像していた君とはまるで違う、食べちゃいたい位凄く可愛い子猫ちゃんだった。」

とのたまつた。あざさ、失神寸前。

「じゃあ、次、君が僕の望みをきく番ね。」

はい選んで上

が違う。

「なによ」わ。

「だから、君が選んで。」

腑に落ちないから

「アーティストの心」

「怒った顔も可愛いよ。

彼はにこつて笑つてみせて

「どちらかには僕の精一杯の気持ちを込めたプレゼントが入ってる

から。これは運だつて思つてさ。僕もこれで覚悟決めよつかと思つてるから。」「

文系の彼女は字面を直訳する。つまり

“ プレゼントの方を選ばなかつたら私につきまとうのはヤメるつて
事だよね？”

憶測は危険だと云つ事を彼女は知らない。

「じゃあ・・・・・。」

あずさの頭の中で舌切り雀が言いました。

『小さい箱を選ぶんですよ。』

舌の無い雀がどうやつてしゃべったの?つていう小学生レベルの突つ込みも今のあずさには浮かばない。

「こつち。」

小さいのを選ぶ。

「ありがとう。」

ハートマークの飛んだ彼の返事に

“外した!”

彼女は直感した。

「あつ、駄目。こつち!—!—

そして指差すは大きなお箱。

「こつちにする。」

そして取り上げ、口元をぎゅっと引き結んだ蒼ざめる彼の顔に

“にやり”

と笑つた。そう、男なんかいらない。いくら格好よくても、好みのタイプでも、経済力が有つておしゃれでも。一緒になつて苦労するのは女だから・・・・・。

「本当にそつちで良いの?」

彼の声は静か。その沈んだ声に

「絶対こつち!—!—

そう答え、さくっと箱を開けてしまった。昔話には深い教訓が有ると言つ事を身をもつて知るハメになるとは露思わず。

4 トリック オー トリーント(後書き)

次話で最終話になります。

5 棺桶に墜ちひやつた話

「?????」

そこに有つたのは携帯電話。しかも革バンドのストラップ付き、新品じゃない誰かが使用している電話。

「はい、貸して。」

彼はやんわりとそれを受け取りワンプッシュでホールをした。

「君が選んだんだからね。」

首を傾げるあずさの前で

「こんばんは。こんな時間に失礼します。いや、プライベートな用件なんですよ、ええ。いえ、お恥ずかしいのですが、以前奥様の事を

“一時惚れでどうしても忘れられなかつた。”

つておつしゃつてましたよね。それが僕にも起きてしまつて。」

彼の眼鏡がきらりと光つた。

「ええ、ええ。その一件は残念でしたね。確か社運をかけた一大プロジェクトが動いていたんですね。心中お察しします。従業員全

てに対して責任をお持ちでいらっしゃいますからね。」

そこは今まで彼女には見せた事の無い明らかにお仕事兼用プライベートモード。

「ええ、僕も同じで手放したくないものですから、結婚を前提に口説いている所なんですが。」

物凄くヤバい雰囲気に逃げ出そうとした彼女の腰に

“がしつ！！”

腕が絡み付き、

「はい、仲人ですか？それはありがとうございます。」

震えるあずさの頭のてっぺんをとんがつた顎が

“こつんこつん”

リズミカルに叩いた。

「ええ、そうして頂けると凄く嬉しいのですが如何せん、彼女に僕

は役不足らしくって。と、いうか、本気が伝わっていないう所で
しそうか。」

電話越しに漏れて来るどこかで聞いた事の有る様な笑い声。

「えつ、そうですか。じゃあ彼女と変わりますよ。」

いきなり携帯を押し付けられ

「僕の上司。」

そんな事いきなり言われても

『何しゃべれって言うのよ！』

とりあえず大げさに口だけ動かした。その耳に

『はじめまして、白玉と申します。』

聞き覚えどこのじやない声が響いた。

『私は市原君の上司ですが、ええ、彼はとても良い青年ですよ。はは。欲を言えば私の娘婿になつて欲しい位たのもしく思つています。ここはせつかくですからいかがでしょ。彼の気持ちをくんで頂けませんか？』

それはどこから聞いても自分の父親の声だった。声を出せるはずの無い彼女の耳元で彼が呟いた。

「選んじやつたね。」

彼に電話を奪われ

「スミマセン会長。」

その白々しい声を聞いた。

「あずさ、照れてしまつたみたいで。」

彼は知能犯だつたりする。彼女も気がついていたけれど、まさかここまでいくとは予想だにしていなかつた事も確か。

「えつ、娘さんと同じ名前？それは奇遇ですね。彼女のフルネームですか？」

わざとらしく送話部を押さえ、しかも大声で

「あずさ、君に夢中になつていて苗字を聞いていなかつたね。」

彼の口元から牙が見える様な気がしたのは夢か幻か。

「白玉あずさだそうです。」

「夢オチって、無いの？」

脱力寸前のあずさに最後の一撃は襲いかかった。

「えつ？会長の娘？まさかそんな夢みたいな話しがありますか？あははは、いえ、正直申し上げてナンパだつたんです。」
もづ、ダメ押し。

『あずさ、おめでとう。』

一瞬だけ彼女の耳に当たがわれた携帯ははつきりそう言っていた。
それから数分後、彼女の結納の日取りは

「今すぐスケジュール確認しますね。もちろん友引の吉田で。大丈夫ですよ。あずさの職場の人達も僕達に好意的でしたから。」
という非常に有能な会長秘書の手によつて決められてしまつっていた。
ハッピー・ハッピー・ハロウイン。彼はにんまり微笑みながら、
腕の中で暴れる子猫を抱きしめいたくご満悦でした。小さな小箱から取り出したのは小指のサイズのプラチナのリング。

「じゃあこれは返品で、石のついたものを選ばないとね。」
ここで

“最初つからそのつもりで”

買う時に

“もしかしたらダイヤリングに変更してもらつかもしれない”
なんて言つて

“喜んで交換させて頂きます”

そんな会話をしていた事は、秘密。

その後彼女がいくら

『騙された！』

つて叫んでも、いや、叫べば叫ぶほど
『照れてる〜〜。可愛い〜〜。』
つてからかわれましたとさ。

5 棚橋に連絡を取った話（後書き）

「おつしか頂ありがとうございます。」

ハロウイーンのお話だったのに季節外れになってしまって反省。

この次はシーズンらしいものの仕上げますね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4195f/>

ハロウィンの悪夢

2010年10月9日04時13分発行